

千貫森

登場人物

男

女

職員の女

男が一人3Dメガネをかけ椅子に座り正面を見ている。しばらくすると職員の女が現れる。

職員「はい。シアター上映は以上です。この山、千貫森ですね。それにまつわる不思議なお話でした。これを見ていただければなぜここがUFOなのかがわかっていただけたと思います。千貫森とUFO、その関係を解明するためにはこれからも様々な謎を解明していく必要があります。しかしもしUFOが存在するならば、そのヒントを必ずどこかに残してくれているはずです。私たちはそのヒントを手がかりにUFO、さらには宇宙の秘密に迫っていきたいと考えています。そして決して遠くはない未来にUFOがその姿を私たちの前に見せてくれるのかもしれない」

男「・・・はい」

職員（手を差し伸べて）

職員「メガネを」

男「あ。はい」

3Dメガネを職員に回収される

職員「お疲れ様でした」

男「あの」

職員「はい？」

男「今でも目撃されるって方は多いんですか？」

男「あの、UFOを」

職員「今は。そうですね。今も。はい」

男「この山の付近に」

職員「この山だったり千貫森ですよ」

男「そうですか」

男「それでここに。こういった施設が」

職員「まあ。もともとは竹下さんですよ」

男「竹下さん？」

職員「竹下登」

男「竹下登・・・」

職員「若い人はわからないかな。あの。DAIGOのおじいさん」

男「だいごのおじいさん？」

職員「あの。北川景子の旦那さんの」

男「ああ。あ。竹下総理」

職員「ええ。竹下元総理の。その竹下総理のときに、ふるさと創生1億円ってのがあったんですね。全国の市町村に1億円あげますから、そのお金で何か町おこし、有効に使ってくださってという事業が」

男「ああ」

職員「それでうちの方は何でやろうかということになって。まあ昔からおじいちゃんおばあちゃんが夜に千貫森を見ると、何か光物があるよなあって」

男「光物」

職員「ええ。昔の家はトイレやお風呂が別個にあったでしょ。あったんです。だから夜外に出て千貫森を見ると、何か光物があるよなあって」

男「光物」

職員「そう昔から言われてたんです。で、じゃあ飯野町はUFOで町おこしをしましょうことで町の青年部さんたちが立ち上がって。はい」

男「なるほど」

職員「お風呂。入られますか？」

男「・・・お風呂」

職員「ええ。入られますか？ふれあい UFO 館をご利用の方は無料で入れますので」

男「お風呂に」

職員「2階が展望風呂になってますんでね」

男「え。今ですか」

職員「まあ今でも後でも大丈夫ですけど。あ。登られますか？」

男「登る・・・ああ、この山に？」

職員「ええ。シアターを見たあとで、やっぱり山頂に登りたいよなという方もいらっしゃいますから」

男「あ。いや。どうしようかな」

職員「登られて、ひと汗かいたので入浴されてくって方もいますね」

男「山頂に登る方のためのお風呂なんですか？」

職員「いえ別に。そういうわけでもないですけど」

職員「お風呂だけ利用していく方もいますし」

男「あ。そうなんですね。」

男「その。UFO風呂・・・みたいなことなんですかね」

職員「UFO風呂・・・ではないですね。展望風呂になります」

男「あ。そうなんですね」

男「温泉か何か？ですか」

職員「いえ温泉とかではないです。展望風呂ですよ」

男「そうなんですね」

職員「どうします？入られますか」

男「あ。どうしようかな」

職員「2階のほうにも少しUFOにまつわるグッズの展示もございますので。よかったらどうぞ」

男「あ。はい」

2階に上がる男。

2階フロアのロビーのベンチで髪を拭く女

男は髪を拭く女を横目にグッズのコーナーをしばらく見ている。

男「え。あの」

男「あ。すいません」

女「はい？」

男「すみません急に話しかけて。あの」
男「UFOとかそういうのに興味があってこちらに？」

女「いえ。そんなこともないですけど。まあ。でも。テレビでそういうのやってたら見るくらいですけど」
男「ああ。そうなんですね」

女「どちらからですか？」
男「あ、東京から」
女「そうなんですね」
男「こちらの方ですか」
女「はい。市内の」
女「UFO好きなんですか？」
男「あ、いやいや。僕も全然詳しくはなくて。今朝、福島駅について。何かないかなって調べてたらたまたま見つけて」
女「そうですか。私もここは初めてで」
男「ああ。そうなんですね」
女「なんかあるなっていうのは知ってて。でも今日が初めてです」
男「ああ」

男「お風呂・・・入られたんですか」
女「あ、はい」
男「どうでした？」
女「どうですかね。普通でした。普通のお風呂でした。見晴らしもまあ普通に良かったんですけど」

男「なんでお風呂なんですかね」

女「ああ。気になりますよね」
男「気になるっていうか。まあそうですね」
女「どこの水使ってるのかとか。線量とか」
男「あ、いや」
女「気にする方は気にしますよね。私もよくわかんないんですけど。でももう気にしてても仕方ないかなって」
男「いや。UFOと関係があるのかなって。そういう意味で気になったくらいで」
女「そっか。ああ。そうですね。なんでですかね」
女「私もお風呂があるとは知らなかったから」
男「まあ全く気にならないわけじゃないですけど。そういうのも」
男「でもよくわかんないですもんね。見えるもんじゃないし」

女「UFOは。見た事あるんですか？」
男「あ、ないです」
女「あ。私もないですけど」
女「天気が良かったから何となくドライブしてて。たまたま寄ったんです。見たら興味持てるかなとも思ったんですけど」
男「あ。そうか。地元の方は基本車ですよ」
女「ええ」
男「僕は駅からバスで来たんですけど」
女「バス。遠かったんじゃないですか」

男「時刻表見たんですけど。駅に戻るバス全然来ないんですね。あと3時間くらいは来なくて」

女「この辺はそうでしょうね。もとは福島市じゃなかったし」

男「あ。そうなんですね」

女「5、6年くらい前に合併されたみたいで」

女「じゃあ。私はそろそろ」

男「あ。すいません」

女「はい。では」

男「はい」

男「あ。あの」

女「はい？」

男「あ。なんか・・・あ。なんか漏れてますね」

女「え？」

男「あの。カバン・・・」

女「え。あ！」

女のトートバックから何か液体が漏れている。床やベンチにも液体が漏れている

女「あ、すいません。ああ」

カバンから水筒を出す。水筒からコーヒーが漏れている。トートバックの中身を出す。中身も濡れている

トイレの洗面場で水筒を洗う女

その間、トイレトペーパーを持ち出し、コーヒーまみれになった床やベンチを拭く男

女「すいません。中ぶたが」

男「中ぶた」

女「中ぶたをつけるの忘れちゃって。ここの」

男「ああ。中ぶたが」

女「これないとフタ締めてても漏れてきちゃうんですね」

女「すいません。あの、大丈夫ですから。すいません」

男「いや、大丈夫ですよ」

女「すいません。ありがとうございます」

床を拭いている二人

女「またやっちゃった」

女「私これ前もやったことあるんです」

男「いやでも。ありますよ。そういうの」

女「すいません」

男「いやいや。全然。コーヒーですか？」

女「はい」

男「カバンのなかのものも、けっこういっちゃってますか」

女「そうですね」

女「あ〜・・・」
女「すみません」
男「いや大丈夫です」

女「すみません。なんか色々思い出しちゃって」

女「私、2年前に同棲してたひとがいたんですね」

女「すみません急に」

男「あ。いえ、」

女「そのひと、元々別の女性と同棲していたんですね。私は最初は知らなくて。でも実は同棲している彼女がいて」

男「あ。はい」

女「で、しばらくそんな状態で付き合ってたんですけど、やっと彼女と別れてくれて。その彼女は出て行ったんですけど。でも家にはその前の彼女の物がいろいろ残ってて」

男「ああ」

女「私それがすごく嫌だったんです」

女「嫌じゃないですか？」

男「はい。まあ。そうですね」

女「食器とかもそうですし。なんか服とかもまだ残ってて。取りに来させるのもなんだし、送るか処分するかしてって私言ったんです」

女「でもなかなか処分してくれなくて。だから彼が仕事の間に、私が少しずつ処分したり、買い換えたりして」

女「でもそれもおかしくないですか？」

男「まあ。そうですね。そういうのは」

女「それこそベッドとかも嫌じゃないですか。同じベッドなんて」

女「だからベッドとかも買い換えて。そしたらベッドの下から松葉杖が出てきたんです」

男「松葉杖」

女「ええ。松葉杖」

女「前の彼女が骨折した時に使ってたらしいんですけど。それが出てきて」

男「ああ。前の彼女の方が。骨折されてたんですね」

女「私もよくわかんないんですけど。その時の松葉杖みたいで」

女「私、松葉杖ってどう処分していいかわからなくて」

男「まあ。普通ゴミじゃなさそうですね」

女「そうなんです。ネットで調べたら粗大ごみ扱いだったり、役所に申請とかしなくちゃいけないらしくて」

女「地域によってもバラバラで。回収に共通のルールがないみたいなんですけど」

女「でもおかしくないですか。なんで私が前の彼女の松葉杖を役所に連絡したりして処分しなきゃなんないんですかね？」

男「確かに」

女「それはさすがに違うなって。彼に、自分で何とかしてって言ったんです」

男「それはそうですね」

女「そしたら、申請の仕方次第で、回収されてお金が返ってくるのがあるんだとか言ってて」

男「ああ。あるんですね。そういうのが」

女「なんでもいいから、じゃあそうしてよって言ってたんですけど、いつまでもやらないんです」

男「それは彼がよくない」
女「でもこればかりは違うなって。私がやるのはなんか違うなって。プライドなのかわかんないですけど」
男「それは彼が何とかすべきだ」
女「だって、何で前の彼女の松葉杖を私が処分しなきゃなんないんですか？」
男「それはおかしい。それはおかしいです」
女「ですよ」
女「私一度だけ役所に電話したんです。そしたら寸法を教えろっていうんです」
男「松葉杖の」
女「はい。でも、何で私が前の彼女の松葉杖の寸法測んなくちゃいけないんですか？」
男「いや確かに。それはおかしい」
女「私、一度はメジャーをあてましたよ。松葉杖に。あてましたけど、これは違うなって」
男「それは違う。あなたが測るのはおかしい。測ったらダメだ」
女「ですよ。おかしいですよ」
男「それは彼の仕事だ」
女「だからその松葉杖だけがずっと部屋にあって。私それがすごく気持ち悪くて」

女「なんでしたっけ。なんで私こんな話してるんでしたっけ」
男「なんでしたっけ」
男「あ。中ぶたが・・・」
女「あ。そうですね。中ぶた」
女「そう。その松葉杖のことで雰囲気悪くなって、ケンカとか多くなってたときに、出かけた先でこれやっちゃったんです」
男「中ぶたを」
女「中ぶたを忘れて。水筒の中身が溢れてて。今みたいにこんな感じで。でも彼何もしてくれなかったんです」
女「私がそれ拭いてる間にどこか行っちゃって。そのまま置き去りにされたんです」
女「私すごい惨めな気持ちになりました。それで別れました」

男「じゃあ。その時以来の。中ぶた」
女「そうですね」
男「いやそれはでも。その彼が良くないですよ。良くないっていうか。うん。おかしいですよ」
男「松葉杖とか。おかしいです」
女「なんかすいません。ありがとうございました」
男「いや全然。ほんとに」

女「滞在されてるのは市内ですか」
男「あ、はい。駅の近くのシティホテルに」

女「私、南福島なんですけど。そこまでだったら車でお送りしますけど」
男「え。あ。でも。いいんですか」
女「駅からも近いんで。福島駅にも電車でひと駅ですし」
男「いや助かります。ありがとうございます」

女「あ。お風呂入られますか？」
男「あ。いや。お風呂。どうしようかな。お風呂に入るつもりはなかったんですけど」
女「そうですね。私もそういうつもりなかったけど」
女「でもお風呂ってそういうものだったりしますよね。急にやってくるっていうか」

男「お風呂がですか」

女「なんか急に入ることになったりしませんか。お風呂って」

女「私は街歩いてて、何となくいい銭湯だなんて思ったら、急に入ってたことがあって。

男「ああ。なるほど」

女「私ももう一回入ろうかな。拭くのでまた汗かいちゃったから」

男「あ。あ、じゃあ。入ろうかな僕も」

男「じゃあ。15分くらいで」

女「はい。15分後くらいに。ここで」

男「はい」

それぞれ男湯、女湯へと入って行く

1階では職員の呼びかけ

職員「只今より12時15分回のシアター上映がございます。千貫森とUFO、これを見ていただければなぜこれがUFOなのかがわかっていただけたらと思います。鑑賞する方は1階のシアターにお入りください」